

らおうという運動である。例えばオランダの木管合奏団やウクライナの歌舞団などを低料金で観覧できるようにしている。これも市民に大変好評である。以上のように、私たちはレクリエーション運動が単に歌やダンスやゲームの指導といったレベルでは全く市民を巻き込んだ運動として広がって行かないことを認識している。レク指導者のレベルを高めながらも当協会が中核となって21世紀の精神面での深みのある運動へと展開してゆく必要がある。これからも更に勉強を重ね、文化の香り高いまちづくりを目指したいと思っている。

地元ジャーナリストの立場から

足立 省三

地域文化とレクリエーションについて2つの視点からお話したいと思う。

第1は、中部地方が自然公園の多い地方であり、また一方で首都圏、近畿圏にはさまれ、高速道路網が発達してきて、自然公園地域に沢山の利用者が入り込むようになった。それにつれてレクリエーション活動、特に山岳のレクリエーション活動のあり方にも多くの問題が発生してきている。

かつて山岳地帯には山岳特有の生活スタイルというものがあった。ところが現在では、中部山岳の山小屋は巨大化し、千数百人収容可能というように変化している。登山者はそれほど苦労することなくそこに到達することができる。彼らにとっては、すでに自然と人間との親密な関係を失っているので、都会の生活と同じようなものを要求している。その結果、山岳地帯での環境破壊が深刻な問題として発生してきた。

こうした問題に対して、かつての日本の山村が保持してきた山岳における暮らしの知恵というものに注目し、それを新しい視点で評価し直すことが必要であると考えられる。野外において自然と人間との関係を取り戻せるような、また楽しい遊びやグループ活動ができるような、つまり生活体験を通したひとつの合宿拠点のようなものが必要となる。長野県大町市にある山岳自然博物館や東京教育大の活動から生まれた子供達の学習施設などはその例である。こうした自然と人間との関係を強化し、それを見直すような拠点を造っていく必要がある。

フランスで1970年に出された環境に対する100項目のレポートがあるが、その中で環境教育について、冷

えきった若者の目を環境変化に対していかに引きつけるか、ということが重要なポイントであると述べている。こうしたことも今後重要になると思っている。

もう1点は、コミュニティづくりとレクリエーションである。コミュニティもレクリエーションも住民自治につながる地域生活の共同基盤というように考えるとすれば、それに対してコミュニティ活動が広がっていく過程というのは、住民参加のしかたで2つのタイプがある。ひとつはクラブ活動型から広がっていくタイプ、もうひとつは生活環境型から広がっていくタイプである。これらを通し、地域の活動情報といったものが横につながってゆくということが最も重要である。今日の地域社会は、多くは補助金などの関係で縦割りになっているので、老人クラブや子供会などの情報は地域の中ではつながってゆきにくい。これらの互いの活動団体の情報を横につないでゆくところに重要な意義がある。これは行政においても同様であり、コミュニティ活動を新しく進めてゆく場合には、連絡会議といったものを市町村役場内に設ける必要があろう。

先ほどの八王子市レクリエーション協会のお話を聞いてこれはすごいと思ったが、かつて昭和40年代に静岡県龍山村というところで森林組合が中心となって村づくりを積極的に推進した事例があるが、この中にはレクリエーションによるまちづくりという昭和50年代後半以降の新しいテーマがすでに提唱されていたと考えている。

また公共投資による市民会館建設などハードの施設づくりが増えて、いわゆるハコモノの都市づくりと言われるわけだが、これを如何に使いこなすかということで、八王子に学ぶところが大きいと考えている。地域文化を育てるような都市づくりの方向に、如何に持ってゆくかということに対して、非常に良い示唆をいただいたと思っている。

観光・レクリエーション論の立場から

鈴木 忠義

地域、文化、レクリエーションという3つの言葉が出てくるが、確かに人間は共同社会の中でしか生きられないわけで、今日それがより高度化してきている。

しかし一方では、人間疎外の傾向が強まっているともいえる。例えば、水道ができたために井戸端会議がなくなり、各戸が風呂をもつようになったために銭湯